

## 明星大学明星教育センターと「明星大学教育新構想」

明星大学学長 落 合 一 泰

2010年に誕生した明星大学明星教育センターが、10周年を迎えました。明星大学明星教育センター規程第2条は、同センターの目的を、「学校法人明星学苑の建学の精神に基づく明星大学の教育の理念及び目的（以下「明星教育」という。）に関する研究・啓発・広報活動、並びに、明星教育の具現化及び学生の社会的・職業的自立促進等に関する教育研究活動を実践すること」と定めています。明星教育センターは、明星大学の教育的特色を明らかにし、その具体的実践を担う組織であると宣言されているのです。

私は学長に就任して2か月後の2020年6月に、「明星大学教育新構想」を学内に発表しました。この「新構想」が目指すのは、「学修者本位」すなわち学生一人ひとりが本学教育に満足し、学修のなかで自分の持ち味に気付いてそれを肯定し、自信と自尊心を高め、本学での学びの価値を発見し、学修プロセスと学修成果を自分で管理し、卒業後も向上心を絶やさない人間の育成です。

具体的には、(1) 専門性や学部学科、学内学外の壁などを越えた交差型学修（クロッシング）、(2) 学部学科での専門的学修（セントラル）、(3) 時代が要請する新たな課題の学修、(4) 明星大学を特色づける学修、などから構成される、明星大学でなければ学修できない、明星大学だからこそ学修できる、際立った高等教育環境を形作ることを目指しています。

この「新構想」実現において、明星教育センターはどのような位置づけにあるのでしょうか。明星教育センターの業務は多岐にわたります。なかでも新生の必修科目である初年次教育「自立と体験1」は、学部横断型である点で上記(1)の第一歩として位置づけられます。また、この科目は、日本高等教育開発協会（JAED）より2014年度 Good Teaching Award を、2019年度には初年次教育学会第1回教育実践賞の最優秀賞を受賞するというように、他大学の模範になる高度な初年次教育を実現しています。本学教育を強く特徴づけているという意味で、「自立と体験1」は上記(4)の重要な一角を占めています。明星教育センターの他の教育業務も「新構想」のなかで新たな息吹を得てほしいと思います。

過去10年間の「自立と体験1」の実践と成果については、この紀要に多くの記述と分析が掲載されていますので、詳細はそちらに譲ります。ここでは、毎年約2,000人の新生が前期授業において、1クラス30人という少人数制の学部学科混合型の約70クラスに分散してこの科目を受講していること、クラス内でも30名が6名単位の5つのグループを作り、グループワークを繰り返す学修法を大切にしてきたことのみ、特記しておきます。

私自身、過去6年間「自立と体験1」を担当し、その教育実践から多くを学んできました。クラスでは、様々なテーマについて思うところを互いに述べあいます。そして議論を重ね、それを書きとめ、また図示します。そして文章にまとめる作業を繰り返すなかで、各自の「思い」が「考え」

に姿を変えていきます。誰でも「思う」ことはできます。しかし、それを自分以外の人に伝えるには論理的な「考え」に高めていく必要があります。それを前期授業 15 回の授業で繰り返し実践的に学んでいくのが「自立と体験 1」です。受講後のアンケートには、「他学科の人との交流が面白い」、「自分の書く力の向上を実感する」という感想がしばしば見られます。それは、自分の「思うこと」を他者に開示し、それをグループ内で受け渡していくなかで、自分の「思い」が「考え」に高まっていく学修プロセスがそこに生まれ、それに手ごたえを感じる学生が少なくないことを示しています。

「自立と体験 1」の受講者総数は 2010 年度 - 2019 年度の 10 年間で 21,039 人に上りました。担当教員数は延べ 526 人。2020 年度まで含めれば、11 年間で受講者総数 23,144 人、担当教員は延べ 574 人、実数で 286 人にもなります。本学の専任教員数は現在約 310 人ですので、大多数の専任教員が一度は「自立と体験 1」を担当し、自分の所属先以外の学部学科の学生の指導に当たってきたこととなります。いわば、大規模な FD が長期にわたり展開されてきたのであり、教員の大学全体を見渡す目を養ってきたと言えるでしょう。

ここ数年、本学入学生の学力が顕著に伸びています。「自立と体験 1」が始動して 10 年、時代の移り変わりに合わせ、「思う」素材や「考える」テーマを一新していくべき時が到来しています。最初の 10 年を第一期と位置付けるならば、これからの第二期では、たとえば SDGs、ESG、AI、デジタル変革 (DX)、起業力 (アントレプレナーシップ) などが取り上げられてもよいかもしれません。学生たちにとり、それらはすでに身近なテーマです。また、それらを知り実践するきっかけをもつことは、その後の専門教育や卒業後においても役立つに違いありません。あるいは、15 回の授業をアナログ (人に親しむ)、ロジカル (「思い」を「想い」に)、コミュニケーション (正しく伝える) の 3 テーマで構成し、順次学修していくのも、「新構想」にふさわしい初年次教育になるかもしれません。

さまざまな社会課題に関する「思い」を、グループワークを手法として具体的な「考え」に昇華させ、問題解決に向かっていく新たな「自立と体験 1」。その魅力がさらに高まり、その受講希望を理由に明星大学を志願する受験生が増えていくかもしれません。

明星大学学長として明星教育センター設置 10 周年を祝い、あわせて今後への期待を申し上げます。

落合一泰 (おちあい・かずやす)

ニューヨーク州立大学大学院人類学科博士課程修了 (Ph.D, 1983)。専攻は文化人類学。一橋大学大学院社会学研究科教授 (1997-)、同研究科長・社会学部長 (2008-2010) を経て一橋大学理事 (教育・学生担当)・同副学長 (2010-2014)。明星大学明星教育センター常勤教授 (2015-)、同副学長 (教育改革担当, 2018-2020) を経て明星大学学長 (2020-)。日本ラテンアメリカ学会理事長 (2016-2018)。メキシコ国立人類学歴史学研究所 (1977-1979)、ハーバード大学 (1981-1983)、マニラ・デラサール大学 (1993)、ポロニヤ大学 (2002-2003)、マドリード・コンプルテンセ大学 (2004, 2006)、メキシコ大学院大学 (2015) 等で客員研究員・客員教授を歴任。主著に『マヤー古代から現代へ』(岩波書店 1984)、*Cuando los Santos Vienen Marchando: Rituales Públicos Intercomunitarios Tzotziles* (メキシコ・チアパス自治大学, 1985)、『ラテンアメリカン・エスノグラフィティ』(弘文堂, 1988)、*Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America* (東京外国語大学アジアアフリカ研究所, 1989)、*Femaleness in Culture: Some Inter-facial Japanese Studies* (マニラ・デラサール大学, 1996)、『トランス・アトランティック物語 - 旅するアステカ工芸品』(山川出版社, 2014) 等。最近の論文に“Transmisión de la cultura suave tras generaciones: lecciones aprendidas a partir de los estudios mayas.” Pedro Pitarch, coord., *Ensayos de Etnografía Teórica, Mesoamérica*, pp.161-192, Nola Editores, Madrid, 2020。